

水谷泰久教授が第 16 回(2025 年度)分子科学会賞を受賞

このたび、「広範な時間・波長領域に対応する時間分解共鳴ラマン分光装置の開発とその独創的な活用によるタンパク質機能発現機構の解明」に関する研究で第 16 回(2025 年度)分子科学会賞をいただきました。これは研究室のスタッフ、学生、多くの共同研究者に恵まれた結果であり、お世話になりました皆様に深く感謝いたします。また、今年度は中澤康浩センター長も同賞を受賞されました。中澤先生とは、ほぼ同時期を分子科学研究所でともに助手として過ごしたこともあり、一緒に受賞できたことはとてもうれしいことでした。

分子科学会賞への応募は、分子科学会会員の他薦によります。私の場合にも、私の研究を以前からよく知ってくださっている或る方から推薦をいただきました。研究の業績も研究の姿勢も私が大変尊敬する方であり、私にとっては、その方が評価してくださったということだけで、すでに十分すぎる喜びでした。

研究の楽しさは、実にさまざまなところにあります。美しい論文に感動したり、予想もしなかった実験データに驚かされたり。一方で、どう知恵を絞ってもなかなかうまく前に進まず、「もっと力がほしい」と心から思うこともあります。そんな一喜一憂の日々を愛おしみながら、こつこつと研究に夢中になっていると、ある日、誰かがとんとんと肩を叩き、「はい、どうぞ」と何かを手渡してくれる。私を賞に推薦したいと書かれたメールは、まさにそのようなものでした。

この文章を読む若い世代の皆様には申し上げたいのは、研究に夢中になっていると、ある日誰かが「肩を叩いてくれる」ということです。私が助手だったことに比べますと、若



授賞式にて. 右から中澤康浩センター長, 中井浩巳分子科学会会長, 水谷

手研究者に対する研究助成や賞が充実しています。それ自体は大変素晴らしいことなのですが、一方で、それらの研究助成や賞を受け続けることが「成功者」の道のように言われたりすることで、プレッシャーを感じたり、あるいは劣等感を覚えたりする若手研究者をしばしば見聞きます。研究生活は厳しいものですが、それは自らの高いスタンダードに由来するもののはずです。他者の評価は研究の駆動力になるものでは決していないでしょう。どうか自分自身のサイエンティフィックマインドから生まれる問いに向き合い、知恵を絞り、その問いに答えてください。私も、自ら考える研究者のスタンダードに到達できるよう、これからも努力し研究を楽しもうと思っています。

(水谷泰久)